

第二回委員会意見に対する対応

	指 摘	対 応
三河湾に関する情報について	底層のDO環境による動物プランクトン現存量の変化を観測した結果があるので、参考にするとよい。	チェサピーク湾(アメリカ)の観測例(Breitburg et al.(1997,1999),Keister et al.(2000),Decker et al.(2004))では、貧酸素水(2mg/L)が存在する水塊内では動物プランクトンの生息が阻害されることが報告されている。
	堆積物からみる過去のプランクトン組成など、過去を推定することは大事であるので認識しておいてほしい。	今後の課題
	クラゲの稚仔はDO 0.5mg/L位でも生存できると聞いたことがある。そういった情報があれば集めて欲しい。	クラゲの生活史のうち、より貧酸素水の影響を受けるポリプ世代でも高い貧酸素耐性が知られている(Condon et al.(2001))
	参考資料では瀬木寄瀬の観測データが整理されているが、中山水道航路ブイのデータも併せて検討して欲しい。	参考資料 - 2に示した。
	ノリの色落ちに関連して、ある程度まとまったものがあれば、資料として重要だと思う。	愛知県水産試験場にヒアリングした結果、公表された資料でまとまったものはない。さらに、資料収集をする。
	底質のCODが2001年以降は増える傾向にあると思うが、最近のデータはないか。	参考資料 - 2に示した。
	表層のT-N、T-Pとその時の底層DOに有意な相関があるかを検討してほしい。	今後の課題
	動物プランクトンの存在量について解析できるよう精力的にデータ収集していただきたい。	愛知県水産試験場にヒアリングした結果、三河湾における動物プランクトン相に関する情報を得たので、モデル構築の参考にする。
実証実験について	捕食試験は現地の懸濁状態を再現した条件を保つことが望ましいので、検討して欲しい。	資料3に示した。
	閉鎖系で長い時間実験すると意図する効果を検証できない。よく考えて実験計画を立てて欲しい。	資料3に示した。
	この実験を夏に行うのであれば、かなり迅速に対応しなければいけないので注意した方がよい。	資料3に示した。
	可能であれば流入水の分解性試験も行えるとよい。	今後の課題
	生物生産性確認調査の調査対象として、下水処理水や排水近辺の水を含めてもらえば良いと思う。	具体的な計画策定にあたっての必要性に応じて、追加実施を検討する。
資料全体について	資料-1から資料-3の関連性でプランクトンに関しては一連の関連があるが、それ以外は課題の抽出と対応していないように思う。	資料の流れ全体を見直し、資料 - 2 ~ 3に示した。